

県道千葉臼井印西線歩道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

—— 佐倉市吉見稻荷山遺跡（6次）——

平成15年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

県道千葉白井印西線歩道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

—— 佐倉市吉見稻荷山遺跡（6次）——



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県文化財センター調査報告書第451集として、千葉県土木部の県道千葉白井印西線歩道建設事業に伴って実施した佐倉市吉見稻荷山遺跡（第6次）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

特に吉見稻荷山遺跡では、縄文時代中期（中峠式）を中心に旧石器時代から中・近世に至る各時代の遺構、遺物が出土しており、複合遺跡としてこの地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し、御指導、御協力いただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年3月25日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 清水新次

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による県道千葉白井印西線歩道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県佐倉市生谷789-1ほかに所在する吉見稻荷山遺跡（遺跡コード 212-044）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、成田調査室長 西口徹が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化財課、千葉県土木部、佐倉市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第3図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐倉」(N1-54-19-14-2)
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成14年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 挿図に使用したスクリーントーン及び記号は本文中、挿図中にその都度記載している。

本文目次

Iはじめに.....	1
1 調査の概要.....	1
(1) 調査の経緯と経過.....	1
(2) 調査の方法.....	1
2 遺跡の位置と環境.....	4
(1) 遺跡の周辺の歴史的環境.....	4
II 旧石器時代.....	6
1 概要.....	6
2 遺物.....	6
III 縄文時代.....	6
1 概要.....	6
2 遺構.....	6
(1) 住居跡.....	6
(2) 土坑.....	9
3 遺物.....	16
(1) 土器.....	16
(2) 土器片鍤.....	21
(3) 石器.....	23
IV 中・近世.....	25
1 概要.....	25
2 遺構.....	25
(1) 溝状遺構.....	25
3 遺物.....	25
Vまとめ.....	25
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 グリッド配置図.....	1	第15図 錢貨拓影図.....	15
第2図 遺跡位置図.....	2	第16図 縄文土器実測図1.....	17
第3図 吉見稻荷山遺跡周辺の地形.....	3	第17図 縄文土器実測図2.....	19
第4図 上層本調査範囲及び遺構分布図.....	4	第18図 縄文土器実測図3.....	22
第5図 下層確認グリッド配置図.....	5	第19図 土器片鍤実測図.....	22
第6図 SI-001平面図及びエレベーション図.....	7		
第7図 SI-002平面図及びセクション図及び エレベーション図.....	8		
第8図 SK-001平面図及びセクション図及び エレベーション図.....	9	第15図 錢貨拓影図.....	15
第9図 SK-002平面図及びセクション図及び エレベーション図.....	10	第16図 縄文土器実測図1.....	17
第10図 SK-003平面図及びセクション図及び エレベーション図.....	11	第17図 縄文土器実測図2.....	19
第11図 SD-001、SD-002平面図及びセクシ ョン図.....	12	第18図 縄文土器実測図3.....	22
第12図 旧石器時代～縄文時代石器実測図1	13	第19図 土器片鍤実測図.....	22
第13図 旧石器時代～縄文時代石器実測図2	14		
第14図 旧石器時代～縄文時代石器実測図3	15		

図版目次

吉見稻荷山遺跡周辺地形航空写真	
発掘前風景、B区下層確認調査、A区下層	
確認調査	
SI-001・SK-002全景、SI-002・SK-003	
セクション、SI-002・SK-003全景	
SK-001全景、SD-001・SD-002全景	
旧石器時代～縄文時代石器1	
旧石器時代～縄文時代石器2	
縄文時代土器1	
縄文時代土器2	
縄文時代土器3	

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経緯と経過

県道千葉白井印西線の歩道建設に伴い、事業区域内に所在する埋蔵文化財の有無と取扱いについて、千葉県教育委員会に照会した結果、当該事業地内には埋蔵文化財が所在することが判明した。その取扱いについて関係諸機関と協議した結果、事業計画の変更は困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが調査を担当することとなった。

平成13年度に発掘調査を行い、縄文時代の住居跡2軒、土坑3基、中・近世の構造を伴う溝等2条の遺構及び旧石器時代～縄文時代の多数の石器、縄文時代中期を主体とする土器などの遺物が検出された。平成14年度に整理作業を行い、今回報告書刊行の運びとなった。

発掘調査及び整理作業に係る各年度の組織、担当職員及び作業内容は、下記のとおりである。

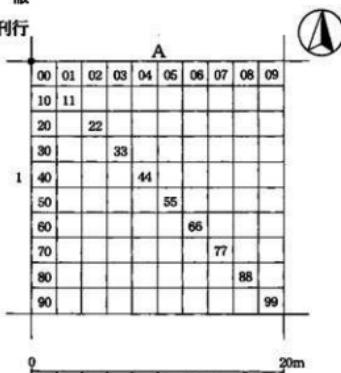
平成13年度	期 間	平成13年4月2日～平成13年5月31日
	組 織	北部調査事務所長 石田廣美
		担当者 上席研究員 田島 新
	内 容	発掘調査 調査対象面積 1,790m ²
		上層本調査 1,192m ²
		下層確認調査 48m ² (本調査なし)
平成14年度	期 間	平成14年11月1日～平成15年1月31日
	組 織	東部調査事務所長 折原 繁
		担当者 成田調査室長 西口 徹
	内 容	整理作業 水洗注記～報告書刊行

(2) 調査の方法

調査区の設定 事業区域内の調査対象範囲全域について公共座標にあわせて東西南北20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西を起点に置いて、北から南に1, 2, 3, ……とし、西から東へA, B, C……として、これを組み合わせて使用した。大グリッド内は2m×2mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に00, 01, 02……として南東隅を99とする。最小グリッドの表記はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、例えば7A-01のようになる。(第1図)

上層確認調査 縄文時代以降の上層の調査は、重機による表土剥ぎを行った後、上層の遺構確認を行い上層対象面積1,790m²のうち1,192m²の本調査を行うことになった。(第4図)

下層確認調査 旧石器時代の下層(ローム層中)の確認調査は、調査区全域に2m×2mを調査対象面



第1図 グリッド配置図



第2図 遺跡位置図

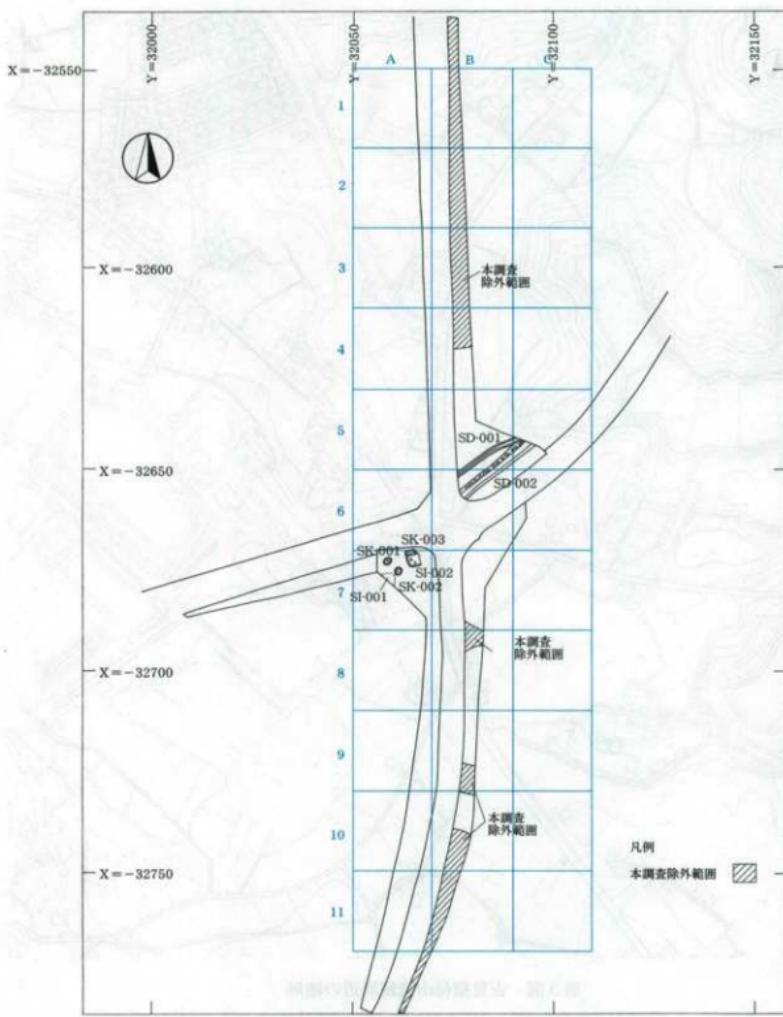


第3図 吉見稻荷山遺跡周辺の地形

積の4%設定した。石器等の遺物が出土しなかったため下層の本調査へは移行しなかった。(第5図)

上層本調査 上層の確認調査の結果に基づき、縄文時代の住居跡、土坑、中・近世の溝などの遺構の精査を行った。

遺構番号 調査時点で表記された遺構番号を踏襲した。調査時に住居跡とされた遺構については、SI-001, 002、土坑についてはSK-001~003、溝についてはSD-001, 002と表記した。

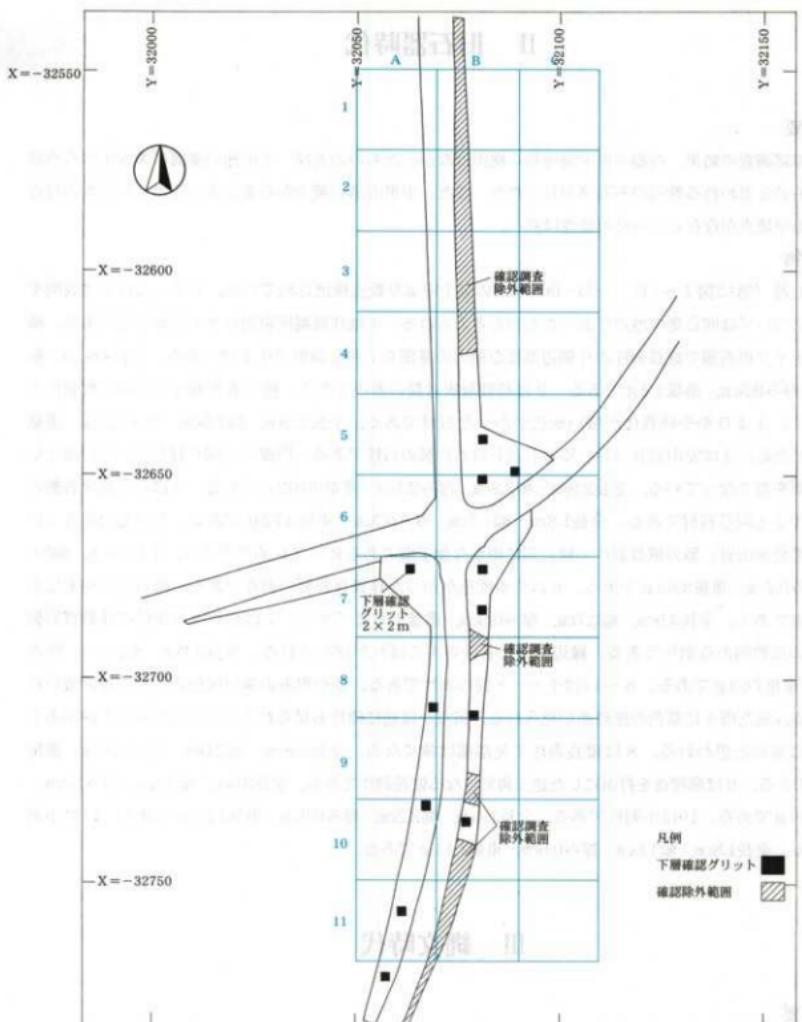


第4図 上層本調査範囲及び遺構分布図 (Scale 1/1200)

2 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡の周辺の歴史的環境 (第2、3図)

吉見稻荷山遺跡は、佐倉市生谷789-1ほかに所在する。佐倉市は千葉県北部のほぼ中央、利根川の下流域にある印旛沼の南岸に位置する。吉見稻荷山遺跡は隣接する吉見稻荷山遺跡A地区を含め、過去に5度の調査が行われ、特に今回の調査区の北側に隣接する調査区¹⁾では縄文時代中期の有段住居跡1軒、



第5図 下層確認グリット配置図 (S=1/1200)

土坑2基、中・近世の東西方向に延びる柵列1条が検出されており、内容的にも関連性が強い。

東側は鹿島川、西側は手縫川の両河川によって開析された、樹枝状に拡がる谷に挟まれた印旛沼南岸の標高28m～30mの台地上に遺跡は立地している。

注1 千葉県佐倉市吉見稻荷山遺跡 1995 財団法人印旛都市文化財センター

II 旧石器時代

1 概要

下層確認調査の結果、石器の集中箇所等の検出はなかったものの表採、その他の遺構の覆土中から当該時期のものと思われる数点の石器等が見られた。また、中世の溝の覆土からまとまって出ているため付近に石器集中地点が存在していた可能性は高い。

2 遺物

(1) 石器（第12図1～11） SD-001号溝の覆土中より数点検出されている。おそらく以下で説明するものについては同じ集中地点であったものと考えられる。1は珪質凝灰岩製のナイフ形石器である。柳葉形のナイフ形石器で縦長剥片の片側刃部及び他方の基部を丁寧な調整で仕上げてある。全長4.6cm、幅1.3cm、厚み0.5cm、重量3.2gである。2は珪質凝灰岩製の剥片である。稜のある剥片で石核調整剥片と思われる。1よりやや珪質化が強い灰色がかった石材である。全長2.3cm、幅1.5cm、厚み1.3cm、重量3.27gである。3は安山岩B（いわゆるトロトロ石）製の石核である。円礫の一部を打ち欠いて打面として小剥離をおこなっている。全長2.9cm、幅3.8cm、厚み2.1cm、重量30.02gである。4は珪質凝灰岩製の小剥片で2と同じ石材である。全長1.8cm、幅1.7cm、厚み0.3cm、重量0.72gである。5は安山岩A（いわゆる黒色安山岩）製の横長剥片の縦刃部に細かな加工痕のあるR・フレイクである。全長2.6cm、幅5.0cm、厚み0.7cm、重量8.69gである。6はやや灰色がかかった珪質頁岩製の剥片である。縦長でやや末広がりの形態である。全長3.9cm、幅2.7cm、厚み0.9cm、重量8.07gである。7はやや淡い灰色の珪質頁岩製の厚みの比較的ある剥片である。縦刃部分に若干の刃こぼれが認められる。全長2.2cm、幅2.3cm、厚み1.2cm、重量7.63gである。8～11はチャート製の剥片である。やや黒みの強い灰色のガラス質の強い石材である。また所々に茶色の節理面が見られる。何点かは他に碎片も見られることから石器工房跡がある可能性は高いと思われる。8は縦長剥片で先端部は薄くなる。全長2.8cm、幅2.0cm、厚み0.8cm、重量4.12gである。9は節理面を打面にした逆三角形になる縦長剥片である。全長3.0cm、幅2.1cm、厚み1.2cm、重量4.69gである。10は小剥片である。全長1.4cm、幅2.2cm、厚み0.4cm、重量1.27gである。11は小剥片である。全長1.8cm、幅1.6cm、厚み0.6cm、重量1.11gである。

III 繩文時代

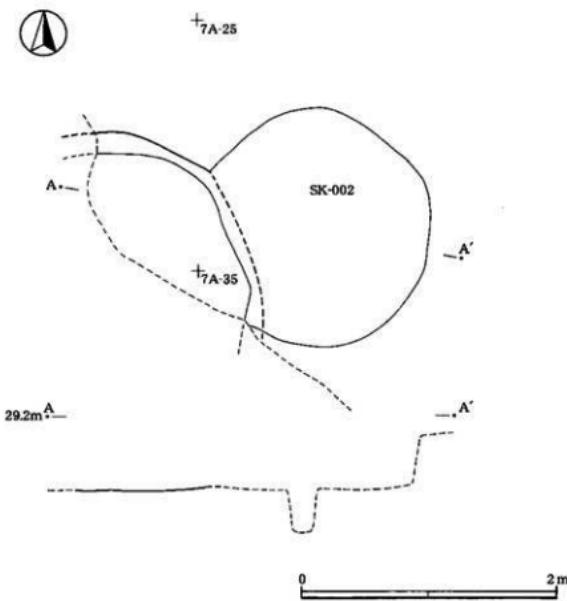
1 概要

調査区内より縄文時代中期頃の住居跡（いざれも一部分）2軒、土坑3基が検出されている。遺物はSI-002の覆土中より縄文時代中期（中縄式を主体）の土器片及び黒曜石などの石器が多く検出されている。

2 遺構

(1) 住居跡

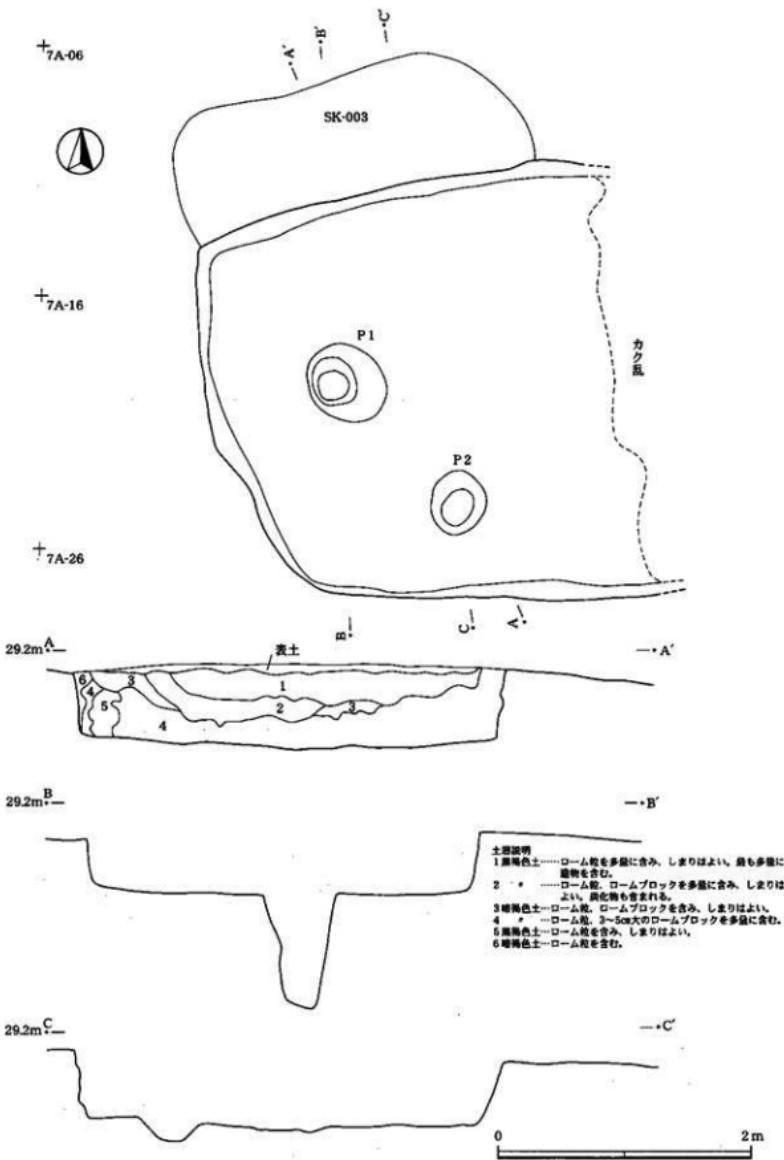
SI-001（第6図）7A-45区付近に位置する。平成12年11月の千葉県教育委員会文化財課の立ち会い時に炉跡が確認されたが、今回の調査された遺構がその時の住居跡の一部である可能性がある。壁の一部



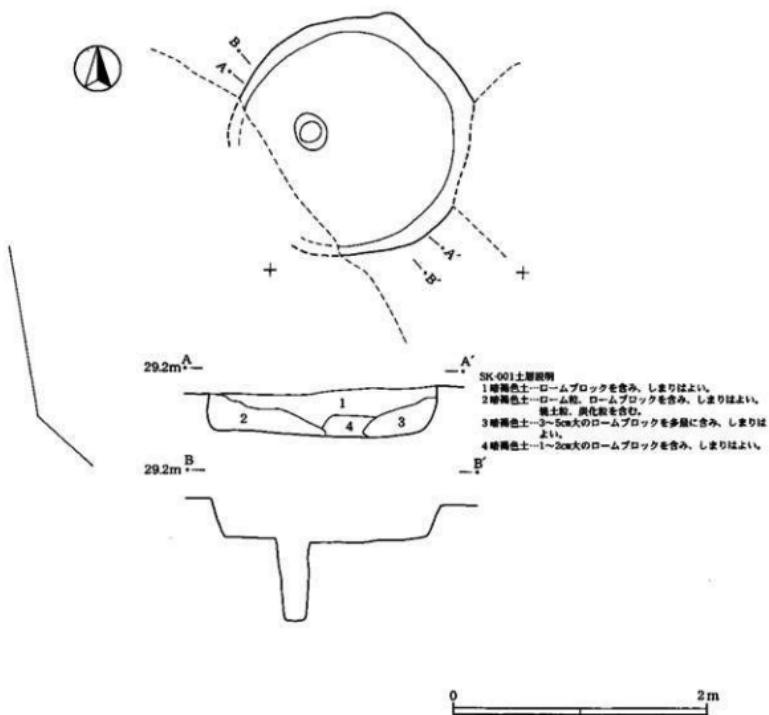
第6図 SI-001平面図及びエレベーション図 (Scale 1/40)

がSK-002号と接しているが、前後関係は不明である。覆土は5cm~10cm大のロームブロックを多量に含む暗褐色土で明らかに人為的に埋め戻されたものと思われる。ピット等の検出はなく、規模等も不明である。時期は縄文時代中期頃と思われるが、遺構の性格は住居跡と考えるにはやや不安が残る。

SI-002(第7図)7A-16区付近に位置する。北側にSK-003(土坑)があり、その一部を壊して作られたものと思われる。床面西側中央部に径60cm、深さ70cm余りの大きなピット1、南側の径40cm、深さ20cmの小さなピット2がある。規模は東側についてはカケ乱で不明であるが3.3m前後の方形に近いやや不整な形と思われる。炉等の施設及び柱穴が並ぶような状態で検出されていないため住居跡とするにはやや不安が残る。覆土は上層がローム粒を大量に含み、しまりが良い黒褐色土である。中層はローム粒、ロームブロックを多く含みしまりがよい黒~暗褐色土である。下層は3cm~5cm大のロームブロックを多量に含む暗褐色土である。なお、大量の土器片の廃棄が覆土上層から中層にかけて見られるため、時期としては縄文時代中期頃の遺構と考えられる。



第7図 SI-002平面図及びセクション図及びエレベーション図 (Scale 1/40)

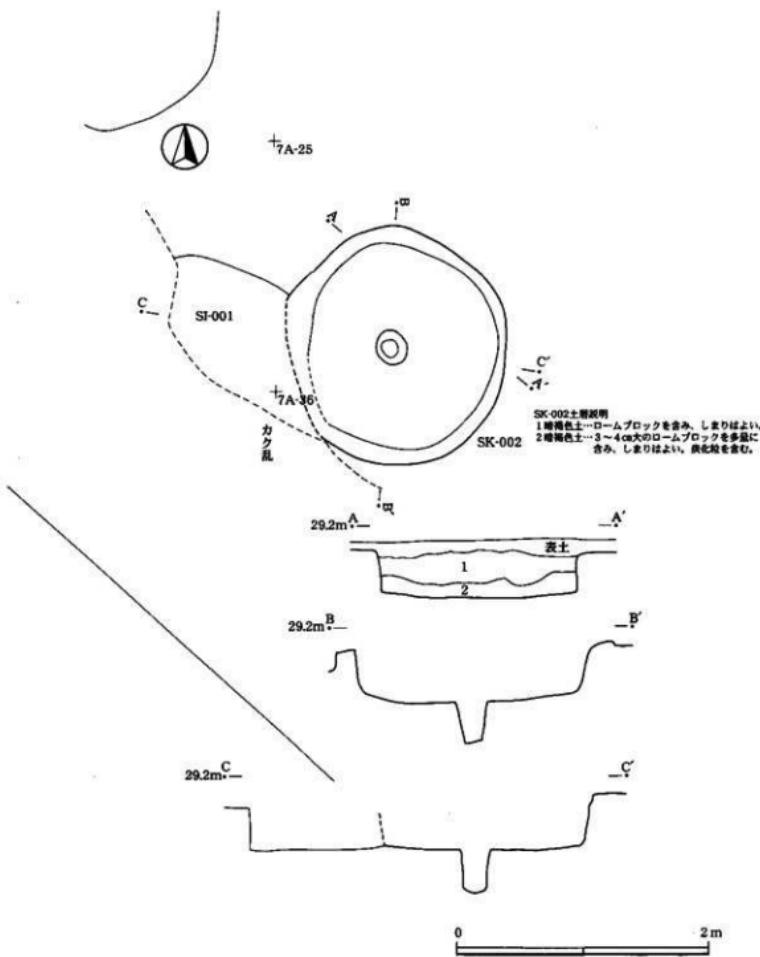


第8図 SK-001平面図及びセクション図及びエレベーション図 (Scale 1/40)

(2) 土坑

SK-001 (第8図) 7A-24区付近に位置する。南西部分がカク乱等で壊されているもののおおよそ径1.8mの円形プランになると思われる。深さは確認面から35cmである。床面はほぼ平坦でやや西側に偏った位置に径20cm、深さ65cmの円形ピットを伴う。いわゆる柱穴を伴う土坑で様々な用途が考えられるものである。時期は縄文時代中期頃のものと思われる。覆土は1層～4層まで分層されている。上層は1層でロームブロックを含みしまりがよい暗褐色土である。下層は2層～4層で、2層はローム粒を含みしまりがよい暗褐色土、3層は3cm～5cm大のロームブロックを多量に含みしまりがよい暗褐色土、4層は1cm～2cm大のロームブロックを含みしまりがよい暗褐色土である。

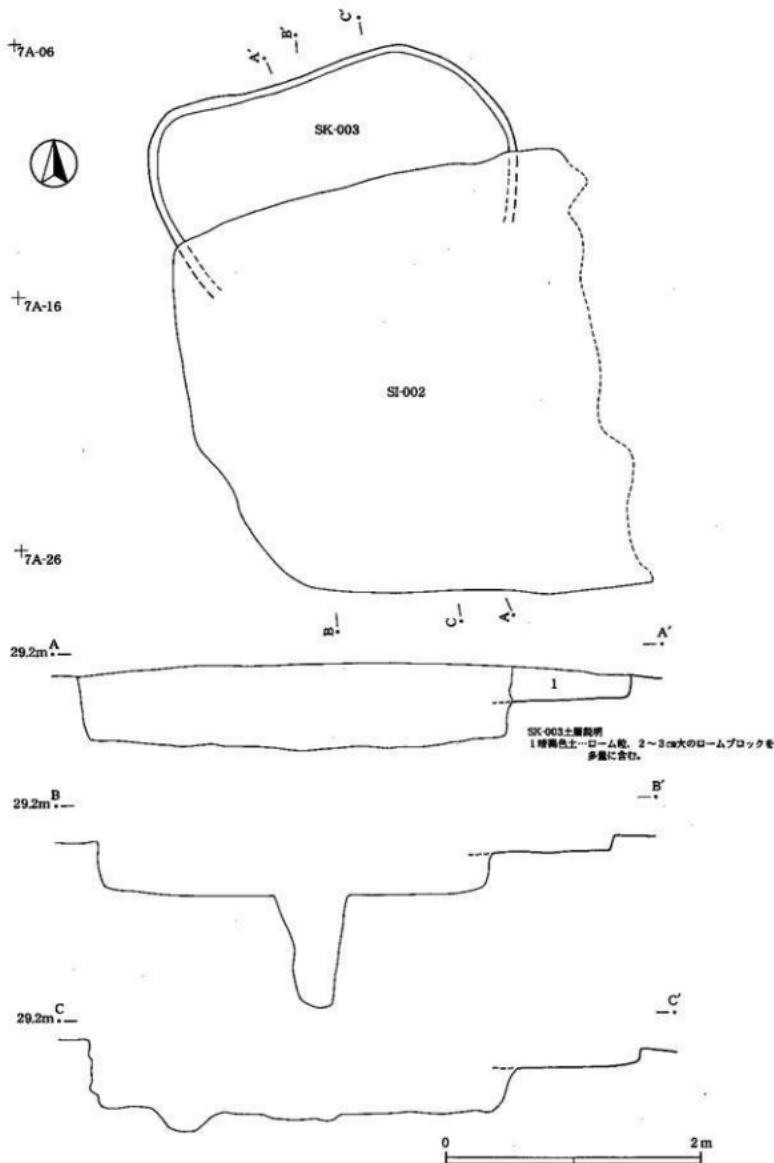
SK-002 (第9図) 7A-35区付近に位置する。南西部分を一部、SI-001 (住居跡) によって壊されているもののおおよそ径1.8mの円形プランになると思われる。深さは確認面から35cmである。床面はほぼ平坦で中央部分に径20cm、深さ30cmの円形ピットを伴う。SK-001と同様な形態で同時期の土坑と判断



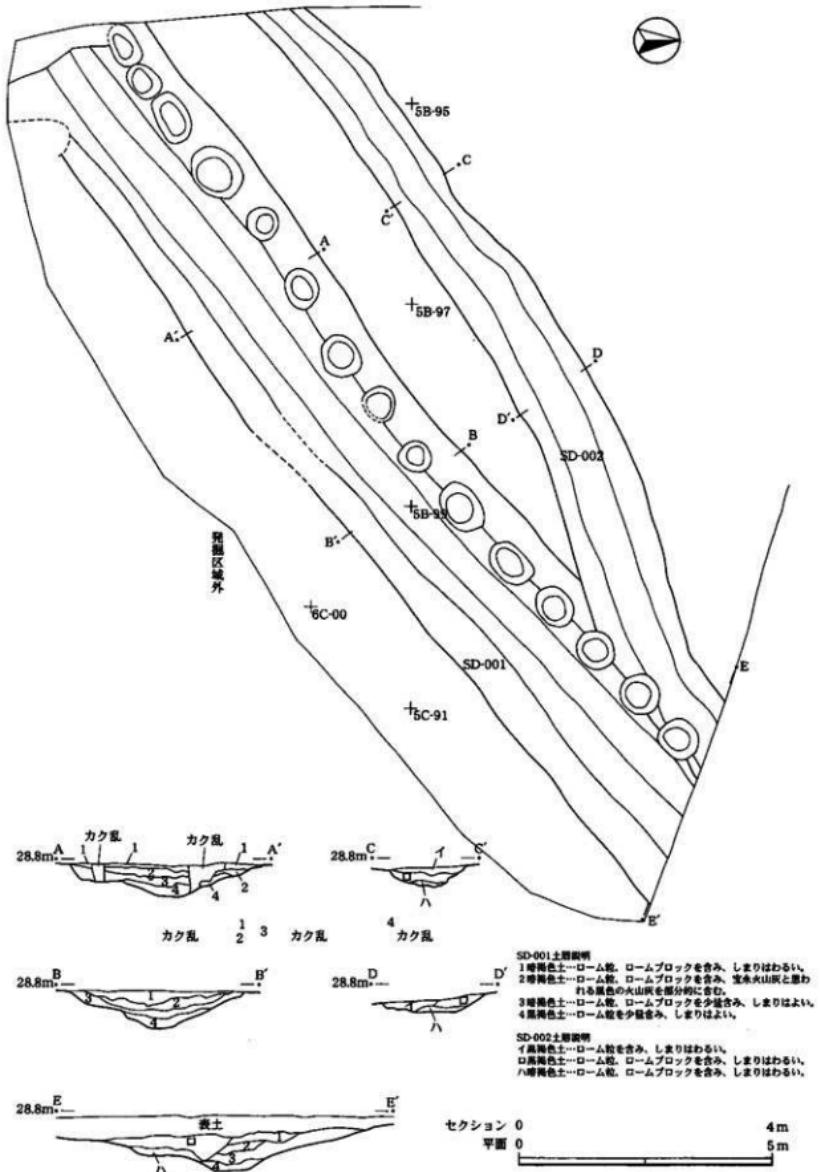
第9図 SK-002平面図及びセクション図及びエレベーション図 (Scale 1/40)

されるものである。覆土は上層がロームブロックを含み、しまりがよい暗褐色土である。下層が3cm~4cm大のロームブロックを多量に含み、しまりがよく炭化粒を含む暗褐色土である。

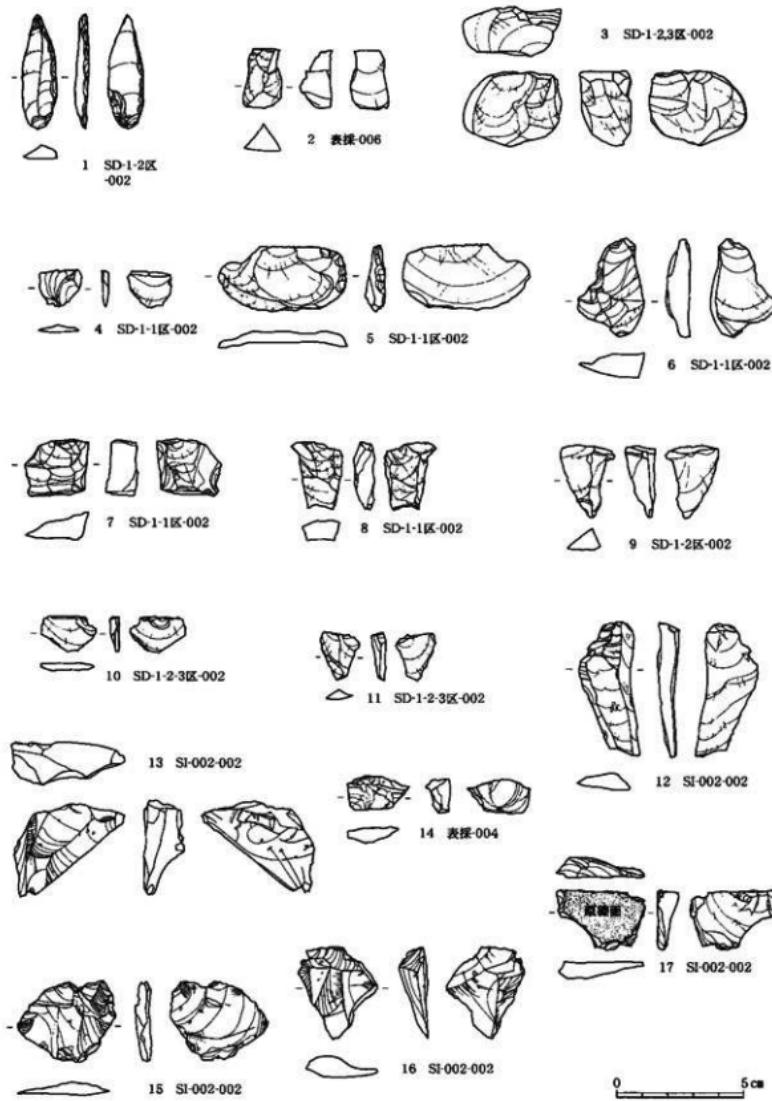
SK-003(第10図) 7A-06区付近に位置する。南側のSI-002(住居跡)があり、半分以上壊されているものと思われる。規模は最大で2.8mほどあり、隅丸方形に近い形であるかと思われる。深さも確認面から20cmほどあり、SI-002よりは20cm程度浅くなる。ピット等の付属施設もなく、形状も異なるため他の土坑とは機能の違う土坑である可能性が高い。時期は縄文時代中期以前といふことができる。覆土は1層でローム粒、2cm~3cm大のロームブロックを多量に含む暗褐色土で埋め土である可能性が高い。



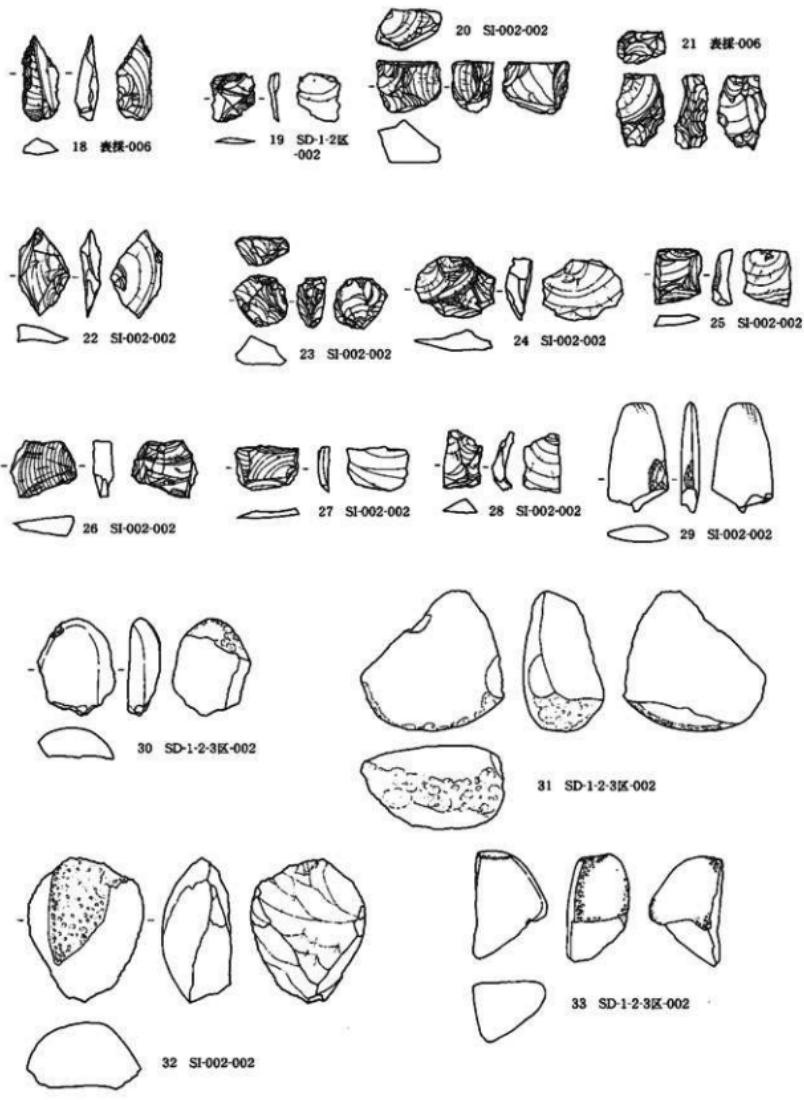
第10図 SK-003平面図及びセクション図及びエレベーション図 (Scale 1/40)



第11図 SD-001, SD-002平面図 (Scale 1/100) 及びセクション図 (Scale 1/80)

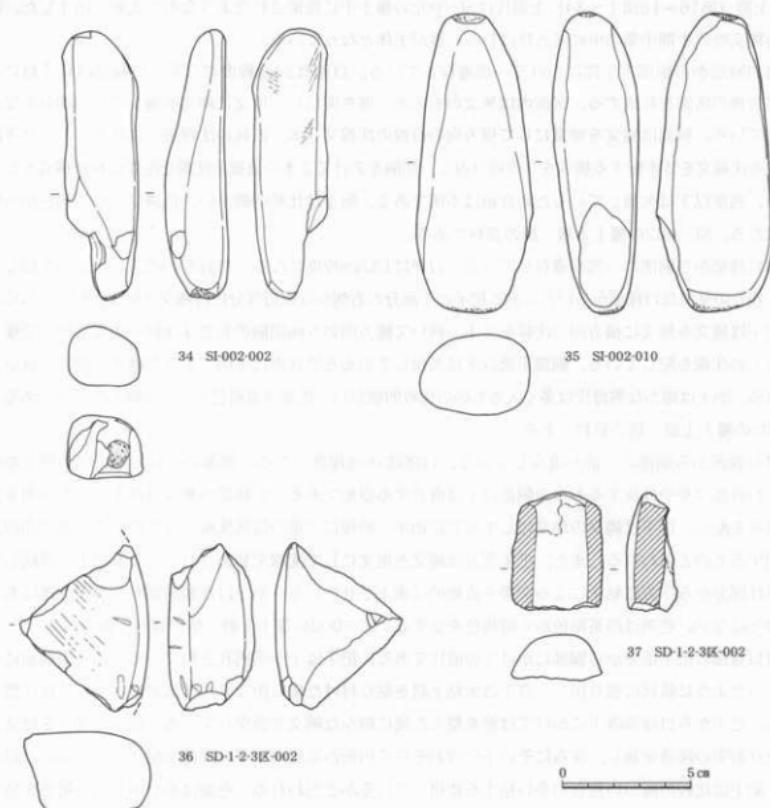


第12図 旧石器時代～縄文時代石器実測図1



0 5 cm

第13図 旧石器時代～縄文時代石器実測図 2



第14図 旧石器時代～縄文時代石器実測図3



第15図 錢貨拓影図 (1/1)

3 遺物

(1) 土器（第16～18図1～34）土器片はSI-002の覆土中に投棄されたような形で大量に出土した。いわゆる縄文時代中期中葉の中峠式と呼ばれる一群が主体となっている。

1は口縁部から胴部下半部にかけて一部遺存している。口径は24cm程度になる。口縁部は粘土紐による突帯で梢円区画を形成する。区画内は無文のものと一部を開口し、地文に縄文を施している部分を交互に配している。胴部は縄文を地文にして横方向の直線の沈線文3本、波状の沈線を1本挟み、さらに下段に直線の沈線文を3本配する構成を2度繰り返し、間隔をあけて2本の直線の沈線を配する模様構成をとっている。底部以下は欠損しているため詳細は不明である。胎土は比較的細かい。色調はやや茶褐色から暗褐色になる。SI-002の覆土上層一括の資料である。

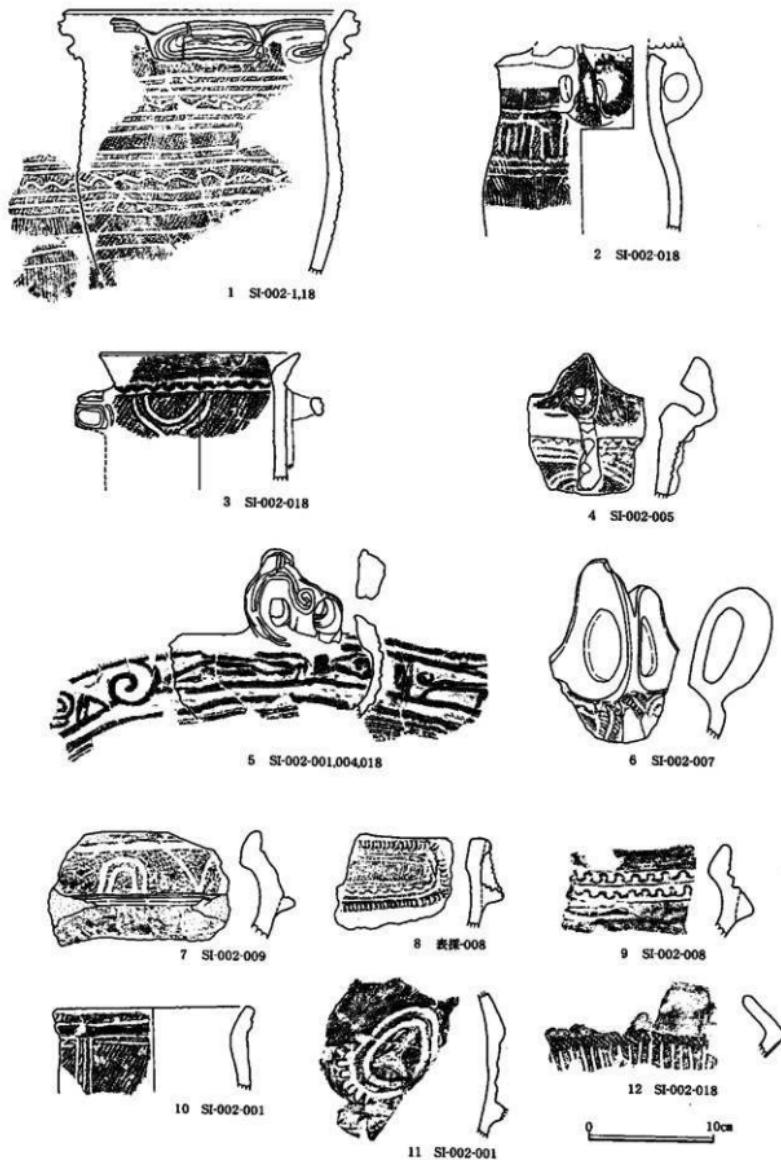
2は口縁部から胴部の一部が遺存している。口径は13.5cm程度になる。口唇部の把手の上部が欠損している。残りの平坦な口縁部から円孔のある把手の下部分の右側から周辺部分には縄文を地文に配している。頸部以下は縄文を地文に横方向の沈線を2本、統いて縦方向の5mm間隔の長さ4cm程の沈線を挟んで横方向の3本の沈線を配している。胴部下部以下は欠損しているため詳細は不明であるが縄文の地文のみかと思われる。胎土は細かな雲母片が多く入るものとの比較的細かい。色調は黒褐色からやや暗褐色気味である。SI-002の覆土上層一括の資料である。

3は口縁部から胴部の一部が遺存している。口径は16cm程度になる。頸部に一对の半円状の把手を配する。口唇部はやや外反するものの胴部以下は直立する器形である。口縁部の無文帯直下に交互刺突を施した隆帯を配し、以下は縄文の地文にして左右に把手、前後に二重の弧状沈線、さらに直下に縦方向の沈線を配するものと思われる。また、把手部分は縄文を地文にして沈線で装飾されている。把手は連続して取り付け部分から下方に粘土による突帯を直線的に垂下させている。胎土は比較的細かく雲母片等はあまり顕著ではない。色調は淡茶褐色から暗褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

4は口縁部の把手部分から胴部にかけての破片である。把手は1か所円孔されているもので表前面にややとがったように弧状に張り出し、直下は太粘土紐を貼り付けた後、指で3か所ほど押さえて波状に整えている。把手から口縁部直下にかけては形を整えた後に細かな縄文で施文している。頸部は縄文を地文として交互刺突の隆帯を施し、さらにその下にはおそらく円形か弧状の二重の沈線を配しているものと思われる。胎土は比較的細かい長石の多い粘土を使用しているかと思われる。色調はやや明るい茶褐色を呈する。内面の調整は丁寧に仕上げられているのが判る。SI-002の覆土上層一括の資料である。

5は口縁部から胴部上半部にかけて約1/2程度遺存している。把手部分は2か所円孔されているもので向かって右側を作った後左側にアーチ状に貼り付けて形づくられている。把手には細かい粘土紐を貼り付けるように装飾されており、把手中央部には右まわりの小さな満巻き文が見られる。口縁部は比較的太粘土紐による区画帯を構成し、左側には時計回りのおおきな満巻き文も見られるが、中程の細い粘土紐を貼り付けて構成される藤手文はやや規格性に乏しく一部はつぶされており、はっきりしない。胎土は比較的細かく長石を多く含む粘土を使用していると思われる。色調は暗褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

6は大形の把手部分の破片である。口縁部方向に沿って外側に向かって並行に円孔されており左右非対称に作られているのが特徴である。把手自体には装飾は施されていない。把手直下には横方向に交互刺突の隆帯を施し、中程に縦方向に二重にキャビラ文を施し区画帯を作り出しているようである。胎土は大きめの雲母片がやや多く見られる。色調は暗褐色を呈する。調整胎土とも阿玉台式土器の影響を強く残す



第16図 繩文土器実測図 1

ものと思われる。SI-002の覆土上層一括の資料である。

7は口縁部から胴部上半部にかけての破片である。口唇部は無文帯で以下を縄文を地文にして横方向の2本の沈線の間に二重の半円状の沈線を配し、さらに外側を弧状の沈線で大きく区画している。さらに外側に大きくくの字に折れ曲がる部分に横方向に太い粘土紐を貼った突帯を施している。それより下の部分は斜め方向にヘラ状工具を使って無文処理を行っている。胎土は雲母片、長石片とも大きいものを含み粗い印象を受けるが、焼成そのものは良好と思われる。色調は暗褐色～黒褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

8は口縁部の破片である。口唇部から方形に太い粘土紐を貼り付けた突帯で区画を作り、内側を2重の細沈線で縁取りさらに内側を縦方向に縄文の代わりに条線で充填している。細沈線の外側の1本の右側から下部分にかけては交互刺突の隆帯状にしてある。その部分はさらに外側に並行して細沈線を施している。区画帯の上面はキャタピラ文で覆っている。区画より下部は無文である。胎土は比較的細かいが雲母片及び長石を多く含む。色調はやや赤みのある淡黄褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

9は口縁部の破片である。口唇部の無文帯の下段に横方向に2列に交互刺突による波状の隆帯を設けている。所々に縦方向からL字状に粘土紐を貼り区画帯を設けている可能性がある。隆帯の下側は太い粘土紐を横方向に並行して貼り付けひさし状にし、胴部は内側に折れ曲がる器形となる。胴部以下は無文となる。胎土は細かな雲母片、比較的大粒の石英砂粒が多く含まれる。色調は淡灰褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

10は口縁部直下から胴部上半部にかけての破片である。縄文を地文にして横方向に粘土紐を貼り付けその上下を沈線でなぞるようにして隆帯として区画している。さらに5mmほど間隔をあけ並行して沈線を施し、中程に隆帯と直行するように3本の沈線を直線的に引いて区画している。胎土は石英粒が比較的含まれるがやや緻密である。色調はやや赤みのある淡褐色である。二次焼成を受けている土器片である。炉窓用の土器片の可能性もある。SI-002の覆土上層一括の資料である。

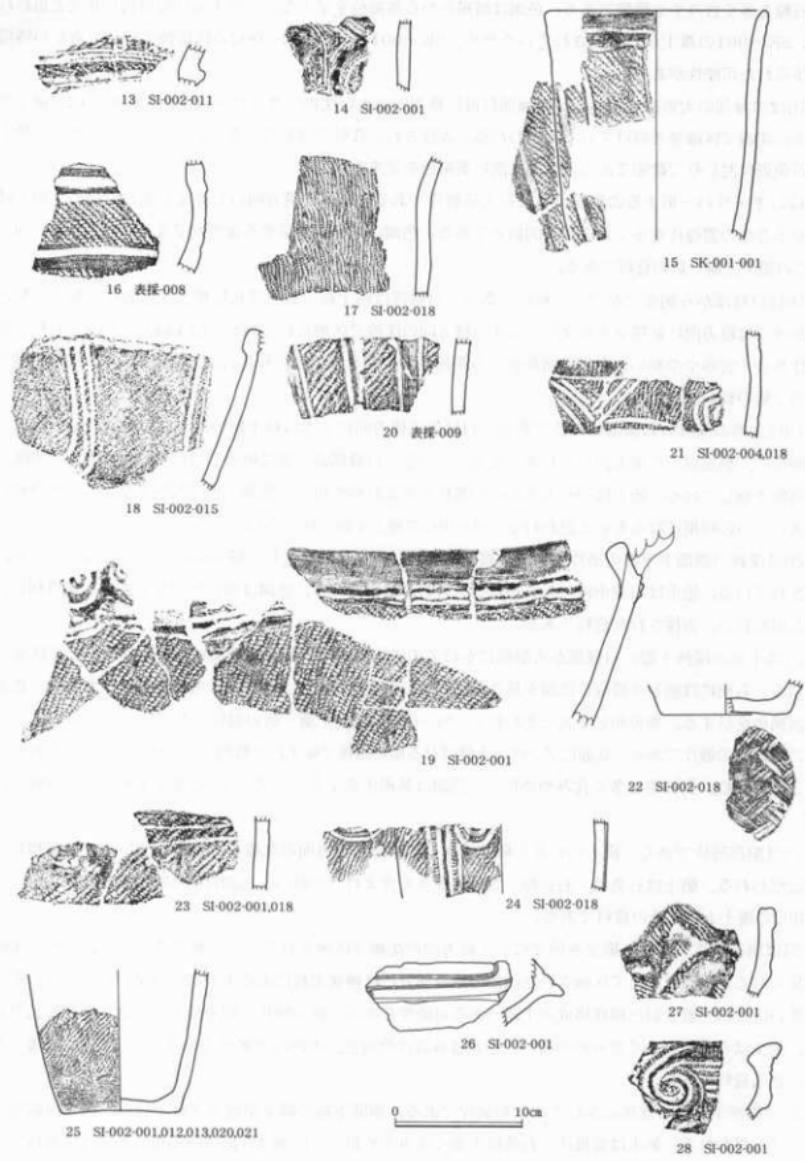
11は把手部分の一部とその下の一区画の破片と思われる。沈線で二重に椭円状の文様を描き、中に弧状に沈線で三角を描き充填している。下外側は粘土紐を貼り付け上部の縁を棒状工具でキャタピラ文を施している。胎土は大きめの雲母片と石英粒を多く含む。色調は淡褐色で内面はやや赤味を帯びている。SI-002の覆土上層一括の資料である。

12は口縁部から頸部にかけての破片である。頸部でくの字に内曲する器形である。口唇部は無文帯で折れ曲がる部分を横方向の縄文を5mm程度の幅で転がし区画している。そこから下部に向かって5mm間隔で縦方向の沈線で施文している。胎土は石英粒を多く含むが比較的緻密である。色調は茶褐色から暗褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

13は頸部の破片で太い粘土紐を横方向に貼り付け区画している。粘土紐の上部表面に横方向の縄文を施文している。胎土は石英粒を多く含みやや粗い。色調は茶褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

14は胴部破片である。粘土紐を貼り付け区画帯を構成し、その周辺に棒状工具を軽く押しつけ半月状に施文している。胎土は細かな雲母片を多く含み比較的緻密である。色調は淡い暗褐色を呈する。SI-002の覆土一括の資料である。

15は口縁部から胴部下半部にかけての大形破片である。口縁部は横方向の2本の沈線で区画され、胴部は地文に縦方向のR L縄文を施し横方向の沈線から垂下する沈線で区画されている。胎土は細かな石英粒、



第17図 繩文土器実測図2

長石粒を多く含みやや緻密である。色調は暗褐色から茶褐色を呈する。この土器は加曾利E II式と思われる。SK-001の覆土から検出されているため、SK-001の土坑はSI-002の住居跡よりやや新しい時期に作られた可能性がある。

16は口縁部の大形破片である。口縁部付近に横方向の太い沈線、さらに下段はL Rの横方向の繩文を地文に沈線で区画帯を設けていると思われる。表採された資料ではあるが加曾利E II式と思われる。胎土は石英細粒混じりで緻密である。色調は淡い茶褐色を呈する。

17はキャリバー形土器の胴部下半部の大形破片である。全体に横方向のL繩文を施している。胎土はやや小さめの雲母片を多く含み比較的緻密である。色調は暗褐色を呈する加曾利E II式と思われる。SI-002の覆土上層一括の資料である。

18は口縁部から胴部にかけての破片である。口唇部は粘土紐で鉢巻き状に横方向に突帯を施す。胴部にかけては縦方向にR繩文を地文して2本の縦方向の沈線で区画されている。胎土は石英粒、長石粒、雲母片を多く含みやや粗い。色調は暗褐色から茶褐色を呈する。加曾利E II式と思われる。SI-002の覆土上層一括の資料である。

19は大形の深鉢の口縁部の破片である。口縁部に横方向に2本の粘土紐の貼り付けられた細い隆帯で区画して、胴部以下に横方向のR L繩文を施している。口縁部の一部に把手が付けられ、渦巻き状の隆帯の装飾を施している。胎土はやや大きめの石英粒が含まれやや粗い。色調は焦げ茶色を呈する。加曾利E I式くらいの時期になるものと思われる。SI-002の覆土上層一括の資料である。

20は深鉢の胴部下半部の破片である。縦方向のR L繩文を地文にして縦方向の2本の沈線によって区画されている。胎土は石英小粒、長石小粒等を含むが緻密である。色調は淡い茶色を呈する。加曾利E II式と思われる。表採された資料である。

21は小形の深鉢土器の口縁部から胴部にかけての破片である。繩文を地文にして沈線を配して区画している。右側には渦巻き模様の沈線が施されている。胎土は石英粒、雲母細片等が多く含まれ粗い。色調は淡褐色を呈する。加曾利E II式と思われる。SI-002の覆土上層一括の資料である。

22は底部の破片である。底面にアンペラと呼ばれる植物纖維で編まれた敷物の上で作られたと思われる。胎土は石英粒、長石粒を多く含みやや粗い。色調は茶褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

23は胴部破片である。縦方向のR L繩文を施している。横方向の沈線を2本配している。加曾利E II式と思われる。胎土は石英粒、長石粒、雲母片が多く含まれやや粗い。色調は明るい燈褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

24は胴部破片である。繩文を地文にして縦方向の沈線で区画されている。渦巻きか二重の円形の沈線が見られる。沈線によって区画された内側の隆帯部分には棒状工具によるキャタピラ文が施されている。あるいは2の土器と似た模様構成の土器である可能性もある。繩文時代中期中頃もしくは加曾利E式である。胎土は石英粒を多く含みやや粗い。色調は外面は燈褐色、内側は黒褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

25は胴部下端から底部にかけての大形破片である。胴部下端に繩文が施されている。繩文中期加曾利E式と思われる。胎土は雲母片、石英粒を多く含みやや粗い。色調は外面は淡褐色、内側は黒褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

26は浅鉢の胴部の破片である。胴部内で曲する器形と思われる。横方向の沈線で区画されている。さ

らに器面は表裏とも丁寧な磨きで仕上げられており、縄文時代後期の土器片と思われる。胎土は比較的細かな雲母片、長石粒、石英粒を多く含みやや粗い。色調は淡褐色を呈する。SI-002の覆土上層一括の資料である。

27は口縁部の破片である。把手部分は粘土紐を貼り付け厚くし、縦方向の縄文を地文として区画の曲線の粘土紐を貼り付け隆帯としている。胎土は雲母片をより多く含み比較的緻密である。阿玉台の土器の特徴を色濃く残したものである。色調は黒褐色を呈する。中期中峠式と思われる。SI-002覆土上層一括の資料である。

28は口縁部の破片である。中程の隆帯による渦巻き文の上面に刺突による細かなキャタピラ文、区画された内側にも沈線の間の隆帯部分に縄文による施文でなく、刺突による細かなキャタピラ文が充填されている。色調は黒褐色を呈する。中期中峠式と思われる。SI-002覆土上層一括の資料である。

29は浅鉢形の土器の胴部破片である。沈線による渦巻き文及び曲線による区画が意識されている。胴部表面には赤彩が認められる。土器の胴部表面は磨かれている。胎土は石英粒を多く含みやや緻密である。色調は灰褐色を呈する。後期の土器片かと思われる。SI-002覆土上層一括の資料である。

30は口縁部の把手の右半分で三角状に上部に張り出す口唇部を粘土を厚く作り出し、粘土紐を貼り付けた突帶で三角に区画している。さらにその区画の内側は比較的太沈線を左斜めに充填している。胎土は雲母片、石英粒を多く含みやや緻密である。色調は淡灰褐色を呈する。中期中峠式と思われる。SI-002覆土上層一括の資料である。

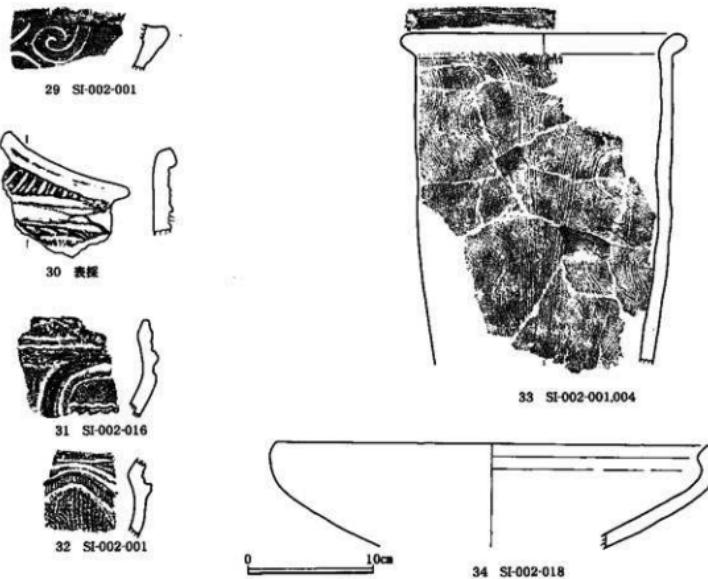
31は口縁部破片である。口縁部に横方向に刺突による波状の沈線を二重に配し、その下に粘土紐を貼ることで区画帯を設けている。さらにその区画内には刺突による梢円状、波状の沈線を区画の内側に沿つてあるいは横方向に充填している。胎土は非常に多くの雲母片、石英粒を含み比較的緻密である。色調は明るい茶褐色を呈する。中期中峠式と思われる。SI-002覆土上層一括の資料である。

32は口縁部破片で口唇部は破損している。おそらく口唇部は厚みを持たせて外反する器形になると思われる。沈線と粘土紐を貼り付けて曲線的に区画されている。区画内は縄文を充填している。区画の突帶上面は刺突によるキャタピラ文を施している。胎土は石英粒を多く含みやや緻密である。色調は淡褐色を呈する。中期中峠式と思われる。SI-002覆土上層一括の資料である。

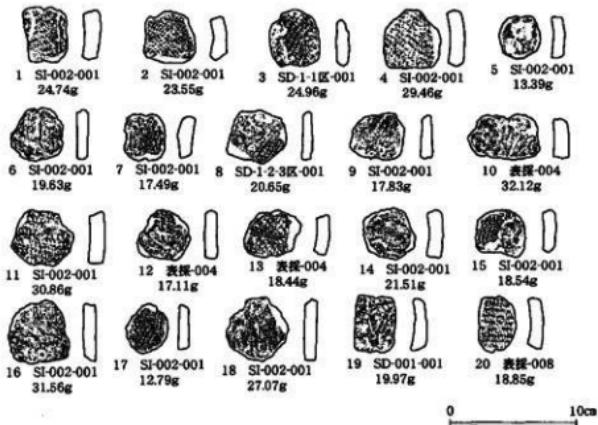
33は口縁部から胴部下半部にかけて大きく残っている。器面を軽く磨いた後に口唇部に横方向に条線、口縁部から胴部にかけては縦方向に直線と波状の曲線を交互に並列させて施文している。後期堀之内式と思われる。点数は少ないものの他にも土器破片が見られる。胎土は石英小粒が少量含まれ緻密である。色調は燈褐色から暗褐色を呈する。内面胴部以下には煤が多く付着し煮炊きに使用された痕跡かと思われる。SI-002の覆土上層一括の資料である。

34は浅鉢土器の口縁部から底部にかけての大形破片である。口縁部が内曲する。内外面とも磨いて仕上げられており装飾は見られない。胎土は雲母片、石英砂を多く含む。全体に粗い。色調は淡褐色から暗褐色を呈する。後期の土器と思われる。SI-002覆土上層一括の資料である。

(2) 土器片錐 (第19図1~20) SI-002の覆土上層の遺物の中から分類を進めていく過程で抽出された。印旛郡文化財センターで調査された地点¹¹⁾でも土坑からまとまって出土しており、漁労活動の一端が窺われる。土器片の角をやや研磨して瘤みもしくは刻みをいれた形態のものが多い。大きさは3.3cm~5.2cm、重量は13.39g~31.56gまでややばらつきがあると思われる。



第18図 繩文土器実測図3 (Scale 1/4)



第19図 土器片錐実測図3 (Scale 1/4)

(3) 石器 (第12~14図12~37) SI-002の覆土上層 (埋め戻し一括) の遺物の中からまとめて黒曜石の剥片等が大量に出土している。図示した他にも多量の小剥片、碎片が見られる。12~28は黒曜石である。

12はSI-002の覆土から検出された黒曜石製の縦長剥片である。乳白色の比較的大粒の狭雑物を含み黒みの強い不透明な石材である。縁辺部にはやや不連続な小剥離が認められる。全長5.3cm、幅2.0cm、厚み0.8cm、重量6.92gである。

13はSI-002の覆土から検出された黒曜石製の剥片である。打撃面側が厚く先端部側が薄くなる形状である。12と同様な黒曜石の石材と思われる。全長3.5cm、幅4.4cm、厚み1.5cm、重量15.53gである。

14は表採された黒曜石製の剥片である。全長1.3cm、幅2.4cm、厚み0.9cm、重量2.7gである。他の黒曜石より一段と狭雑物が多い。

15はSI-002の覆土から検出された黒曜石製の剥片である。12と同様に乳白色の比較的大粒の狭雑物を含み黒みの強い不透明な石材である。全長3.1cm、幅3.8cm、厚み0.6cm、重量5.06gである。やや薄手の剥片である。

16はSI-002の覆土から検出された黒曜石の剥片である。やや厚みがあり先端部が逆三角形に薄くなる形状である。12と同様に乳白色の比較的大粒の狭雑物を含み黒みの強い不透明な石材である。全長3.6cm、幅3.2cm、厚み1.2cm、重量7.15gである。

17はSI-002の覆土から検出された黒曜石の剥片である。背面はほぼ原礫面で覆われている。先端部は打撃時に折れたものかと思われる。12と同様に乳白色の比較的大粒の狭雑物を含み黒みの強い不透明な石材である。全長2.3cm、幅3.5cm、厚み0.8cm、重量5.11gである。

18は表採された黒曜石製の石器である。縁辺部を鋸歯縁状に加工しており、石錐の未製品かもしれない。石材は12と同様に乳白色の比較的大粒の狭雑物を含み黒みの強い不透明な石材である。全長3.4cm、幅1.4cm、厚み0.9cm、重量3.22gである。

19はSD-1-2区から検出された黒曜石製の剥片で12と同じ石材と思われる。比較的薄手で縁辺部は鋸歯状である。全長1.9cm、幅1.7cm、厚み0.4cm、重量0.92gである。

20はSI-002の覆土から検出された黒曜石製の石核で12と同じ石材と思われる。多方位に小剥片の剥離を行っている。全長2.0cm、幅2.6cm、厚み1.6cm、重量10.29gである。

21は表採された黒曜石製の石核で12と同じ石材と思われる。あるいは鋸歯縁状に加工された削器になるかもしれない。全長2.9cm、幅1.9cm、厚み1.3cm、重量7.23gである。

22はSI-002の覆土から検出された黒曜石製の剥片で12と同じ石材と思われる。横広の剥片で先端部が厚みを増す。先端部の縁辺部分に多少のリタッチが残る。全長2.0cm、幅3.5cm、厚み0.7cm、重量2.92gである。

23はSI-002の覆土から検出された黒曜石製のくさび形石器で12と同じ石材と思われる。先端部に使用時にいたる小剥離痕を残す。全長2.0cm、幅2.1cm、厚み1.1cm、重量4.32gである。

24はSI-002の覆土から検出された黒曜石製の剥片で12と同じ石材と思われる。横広の比較的厚みのある剥片である。先端部に若干の刃こぼれが見られる。全長2.4cm、幅3.2cm、厚み0.9cm、重量5.55gである。

25はSI-002の覆土から検出された黒曜石製の剥片で12と同じ石材と思われる。右側辺部分に抉り状のリタッチが見られる。全長2.2cm、幅1.9cm、厚み0.7cm、重量2.76gである。

26はSI-002の覆土から検出された黒曜石製の剥片で12と同じ石材と思われる。右側縁部に多くの打痕が見られるところからくさび形石器になる可能性もある。全長2.2cm、幅2.5cm、厚み0.7cm、重量4.2gである。背面は黒曜石特有の貝殻状断口が見られる。

27はSI-002の覆土から検出された黒曜石製の剥片で12と同じ石材と思われる。先端部の縁辺部分に多くの微細な剥離痕が見られる。使用痕の可能性が高い。全長1.8cm、幅2.5cm、厚み0.4cm、重量1.83gである。

28はSI-002の覆土から検出された黒曜石製の剥片で12と同じ石材と思われる。左側辺部分に微細な剥離痕が連続的に見られる。使用痕の可能性がある。全長2.3cm、幅1.5cm、厚み0.5cm、重量1.5gである。

29はSI-002の覆土から検出された緑泥片岩製の小形の磨製石斧である。自然石の一部を磨きやや粗く仕上げている。刃部側が欠損しているものと思われる。残全長4.2cm、幅2.3cm、厚み0.4cm、重量10.67gである。

30はSD-1-2-3区から検出されたホルンフェルス製の叩き石である。上下両端には打撃痕が見られる。全長3.9cm、幅3.1cm、厚み1.5cm、重量15.63gである。検出された場所から旧石器時代の遺物の可能性もある。

31はSD-1-2-3区から検出された粗粒安山岩製の叩き石である。円礫の一部を叩き石に使用している。縁辺部に沿って著しい打痕が残されている。全長5.7cm、幅5.6cm、厚み3.2cm、重量97.65gである。検出された場所から旧石器時代の遺物の可能性もある。

32はSI-002の覆土から検出されたメノウ製の叩き石で大形の剥片を再利用しているもので、背部の礫面に沿って打痕を残している。全長5.7cm、幅4.4cm、厚み2.7cm、重量77.44gである。

33はSD-1-2-3区から検出されたホルンフェルス製の叩き石である。縁辺部分に集中的に打痕が見られる。全長4.3cm、幅2.9cm、厚み2.3cm、重量32.49gである。検出された場所から旧石器時代の遺物の可能性もある。

34はSI-002の覆土から検出された砂岩製の叩き石である。細長い棒状の礫を使用して上下両端に打痕を残す。下端部分は打撃時に破損している。全長10.7cm、幅3.1cm、厚み2.4cm、重量98.37gである。一部磨石として転用された可能性もある擦痕も見られる。

35はSI-002の覆土から検出されたホルンフェルス製の叩き石である。短冊状の礫を使用して上下両端に打痕を残す。下端部分は打撃時に破損している。全長11.9cm、幅4.5cm、厚み3.3cm、重量265.5gである。

36はSD-1-2-3区から検出された砂岩製の磨石である。円礫を使用して片面に擦痕が多く見られる。1/4程度遺存している。被熱してやや赤化している。全長6.7cm、幅5.7cm、厚み3.5cm、重量111.2gである。検出された場所から旧石器時代の遺物の可能性もある。

37はSD-1-2-3区から検出された砂岩製の磨石である。円礫片を使用して両側辺部分が磨石として使用され磨滅していることが判る。全長4.6cm、幅3.5cm、厚み1.9cm、重量39.6gである。検出された場所から旧石器時代の遺物の可能性もある。

IV 中・近世

1 概要

中・近世にかかわりのある遺構は柵列の伴う溝1条と溝1条である。遺物は覆土中より錢貨3枚と若干の陶磁器、壊り鉢片等が検出されている。

2 遺構

(1) 溝状遺構

SD-001(第11図) 6B-14区～5C-62区付近にかけて南西方向から北東方向に幅3.5m、深さ60cm、全長20mの規模で検出されている。やや北よりの中央部分に径60～100cmの円形、椭円形のビットが50cm～60cmの間隔ではほぼ等間隔に並ぶ。覆土は1層～4層まで分層されており、第2層では宝永火山灰らしき灰層が見られることからこの柵列を伴う溝の築造年代は中世末までさかのぼる可能性が高い。覆土は1層がローム粒、ロームブロックを含みしまりが悪い暗褐色土である。2層がローム粒、ロームブロックを含み、宝永の火山灰を部分的に含む暗褐色土である。3層がローム粒、ロームブロックを少量含みしまりがよい暗褐色土である。4層がローム粒を少量含みしまりがよい黒褐色土である。覆土中より若干の錢貨(寛永通寶)及び近世陶磁器片が検出されている。後世の混入の可能性が高い。

SD-002(第11図) 6B-04区～5C-61区付近にかけて南西方向から北東方向に幅1.2m、深さ30cm、全長20mの規模で検出されている。北東部分ではSD-001と合流するようで覆土の観察から判断するとSD-001の一部を削平するように作られており、古くても近世初頭くらいに築造されたものと思われる。覆土は上下2層に分層されており、上層がローム粒を含みしまりが悪い黒褐色土である。下層がローム粒、ロームブロックを含みしまりが悪い黒褐色土である。場所によってはロームブロックを多く含み、暗褐色土に色調が変化しているようである。

3 遺物(第15図1～3)

1～3は錢貨類である。SD-002の覆土から1枚、表探で2枚の寛永通寶が検出されている。他には図示可能な遺物はないが、中世末の壊り鉢の破片、近世初頭の陶磁器の破片がSD-001、SD-002の覆土中より数点検出されている。

また、少量の小鍛冶滓が調査区内より見つかっているが、遺構に伴うものではないので時期及び内容については不明な点が多い。将来隣接地より小鍛冶等の製鐵関連遺構などが検出される可能性も考えられる。

V まとめ

旧石器時代 遺物のみ検出されたので内容に乏しいため詳しく述べないが、内容的に見るとナイフ形石器を伴う立川ロームVI層(第2黒色帯直上)あたりに位置するものかと思われる。台地上に少なからずこの時代の人々が活動していた痕跡がうかがわれる。

縄文時代 SI-002の覆土を中心として大量の縄文時代中期の中縄式土器の破片等が出土している。これらの土器群は把手に特徴があるものが多い。文様は交互刺突による波状の隆起、沈線文、キャタピラ文などバラエティーに富む。また、土器片錠が一括資料の中から多く抽出できたことも1つの特徴といえ

る。この時期がメインではあるが、後期の土器片も多少みつかっており、活動時期が中期から後期へと比較的長く活動していた可能性もある。

中・近世 横列を伴って検出された溝は馬土手などと係わりがある可能性もあるため今後、遺跡の周辺調査で確認されることが期待される。

注1 千葉県佐倉市吉見福荷山遺跡 1995 財団法人印旛都市文化財センター

参考文献 下総考古学研究会 1991 『下総考古学』12

写 真 図 版







SI-001
SK-002
全景



SI-002
SK-003
セクション



SI-002
SK-003
全景

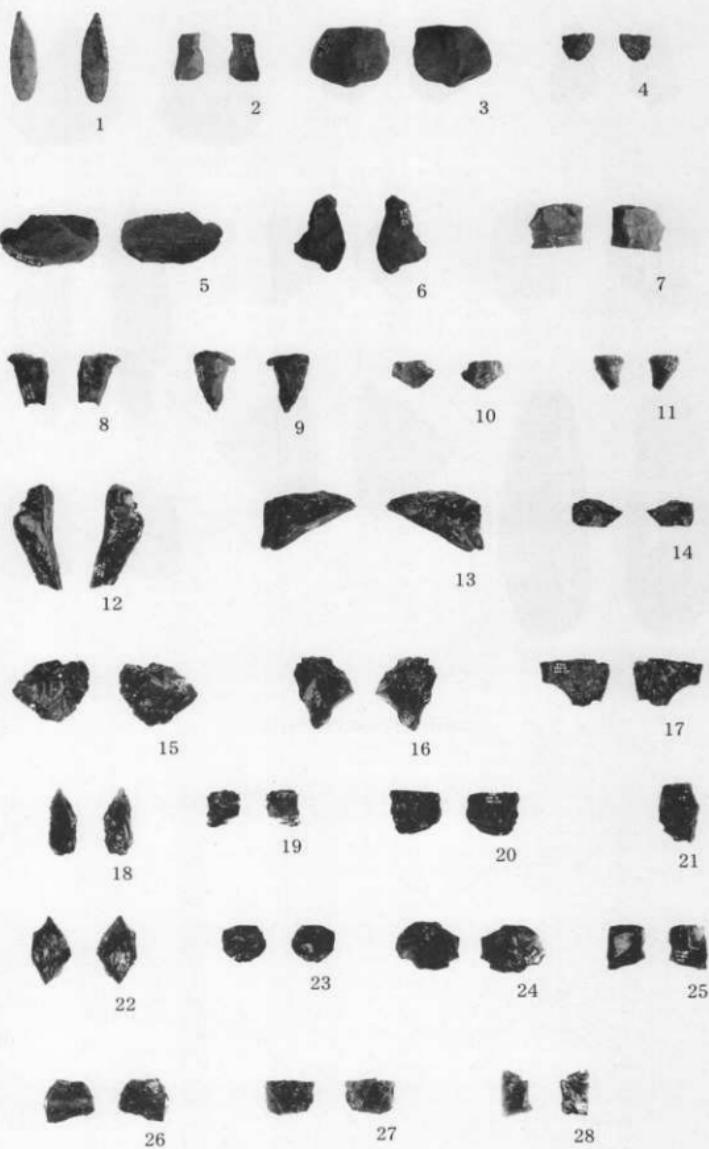


SK-001
全景

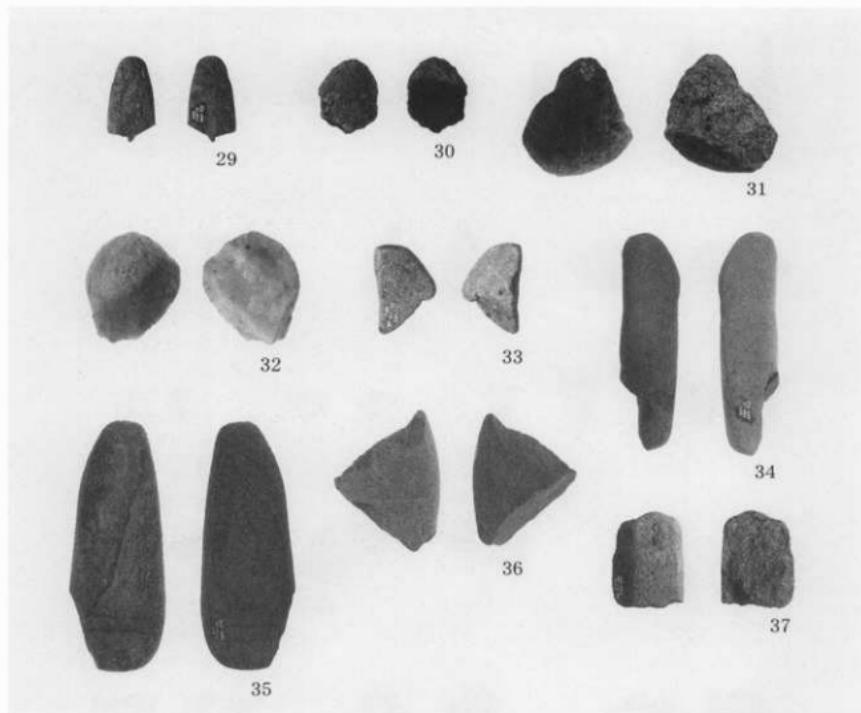


SD-001

SD-001
SD-002
全景



旧石器時代～縄文時代石器 1



旧石器時代～縄文時代石器 2



1



2 (左側面)



2 (正面)

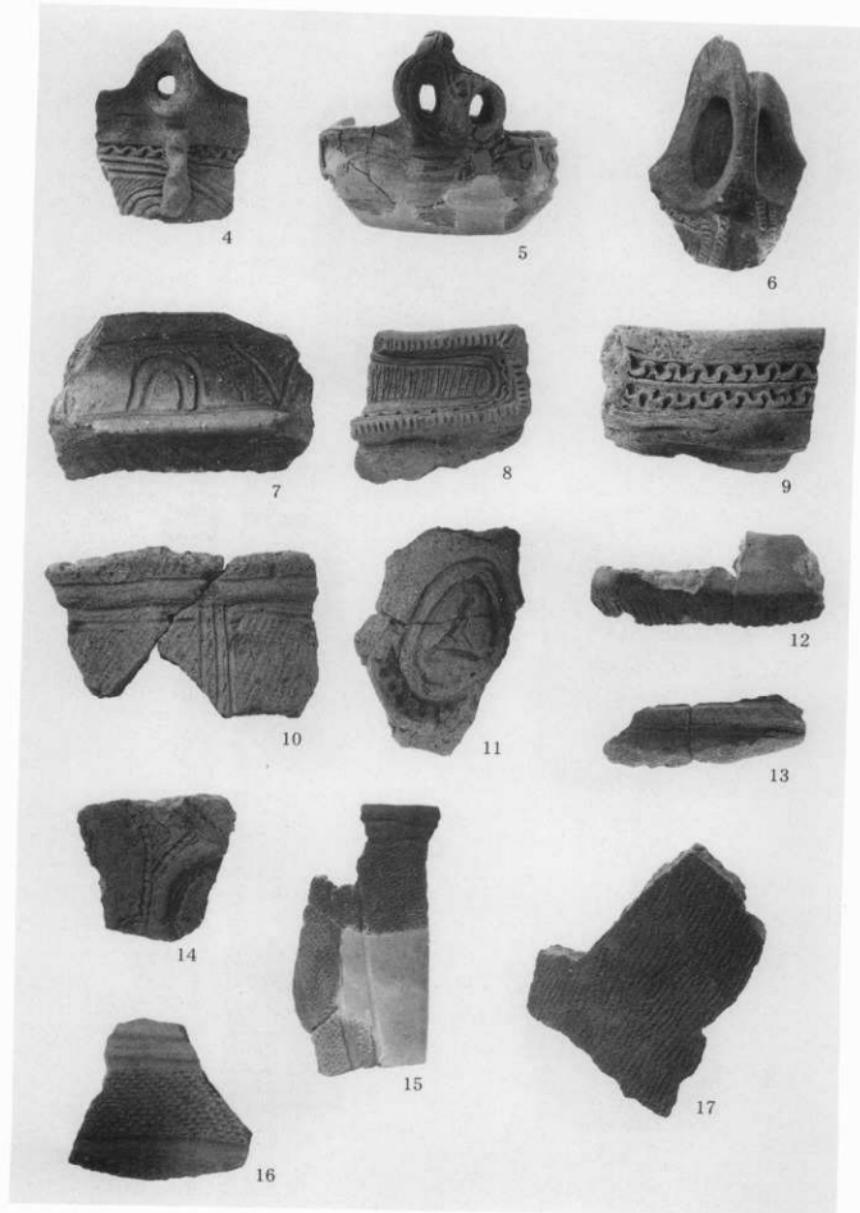


3 (左側面)

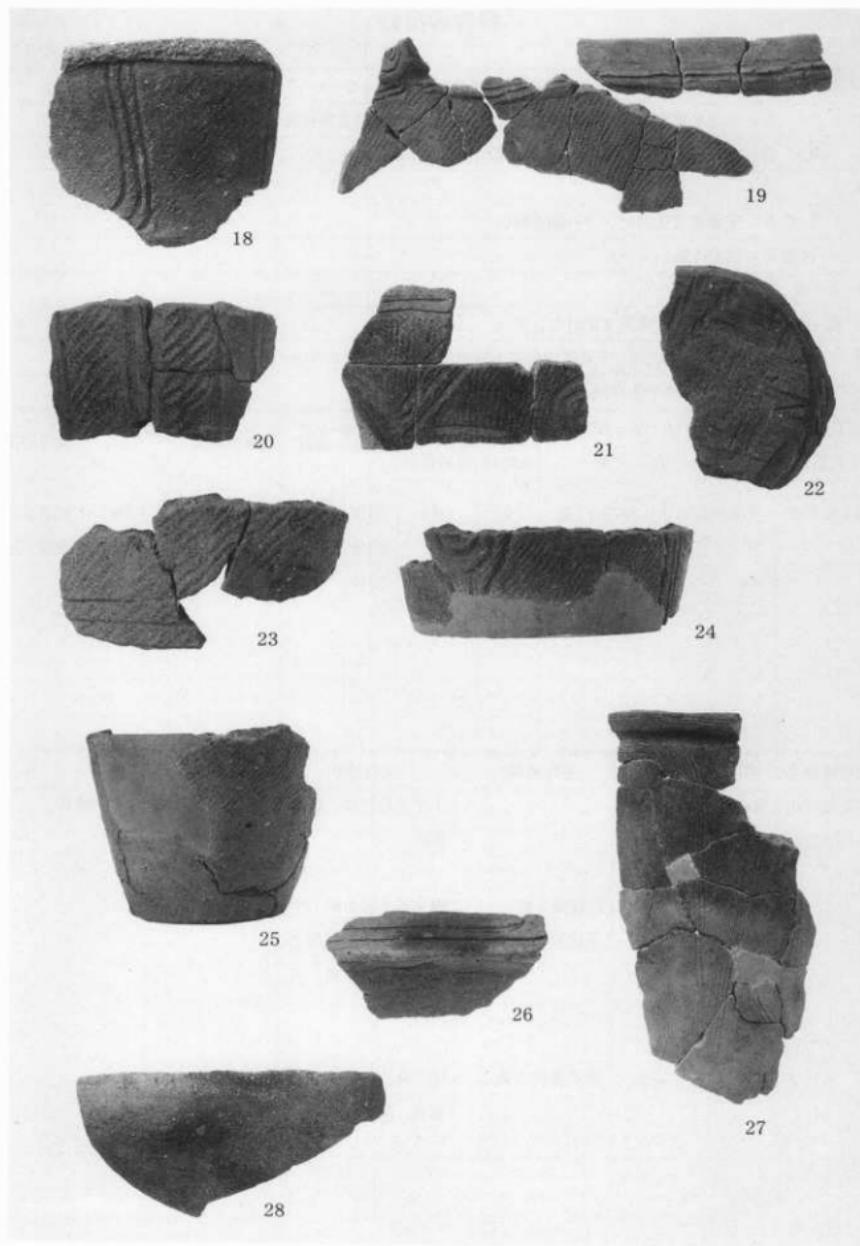


3 (正面)

縄文時代土器 (1)



縄文時代土器 (2)



縄文時代土器 (3)

報告書抄録

ふりがな	けんどううちばうすいいんざいせんはどうけんせつにともなうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	県道千葉白井印西線歩道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書						
副書名	-佐倉市吉見稻荷山遺跡（6次）-						
卷次							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第451集						
編著者名	西口徹						
編集機関	財団法人千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811						
発行年月日	西暦2003年3月25日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしみいなりやま 吉見稻荷山	ちばけんさくらしのおがかい 千葉県佐倉市生谷789-1他	212	044	35度 42分 25秒	140度 11分 16秒	20010402～ 20010531～	1,790	県道歩道 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉見稻荷山	包蔵地	旧石器時代		ナイフ形石器、石核 剥片	縄文時代特に中期の中粒式 土器を多量に検出した。
	集落 包蔵地	縄文時代	住居跡2軒 土坑3基	縄文式土器中期（中 粒式）、後期（堀之内）、土器片錐、石 器	
	包蔵地	中・近世	溝状造構2条	擂り鉢片、スラグ、 銭貨、陶磁器片	

千葉県文化財センター調査報告第451集

県道千葉白井印西線歩道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

—— 佐倉市吉見稻荷山遺跡（6次）——

平成15年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県土木部

千葉市中央区市場町1番1号

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 太陽堂印刷所

千葉市中央区末広1-4-27
